注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
アタシとバカと大切な時間

【作者名】
シェリー

【あらすじ】
それは明久×優子の小説です。
まだ中1なので、うまく書けているか、わかりません。
誤字などがたくさん入っていると思います。
誤字やアドバイスなどは教えてください。
できるだけ毎日書こうと思います。
まだまだ初心者です。よろしくお願いします！

振り分け試験

優子ｓｉｄｅ

今日は振り分け試験の日だ。
毎日頑張って勉強したから大丈夫だと思う。
ＡＭ９：００　教室にて
先生「振り分け試験、開始です。」
カサッとテスト用紙の音がした。
以外と難しいけど、多分いける。
自分に向かって「大丈夫、大丈夫」と心の中で言っていた。
でも急にお腹が痛くなってきた。とても痛い。
病院に行きたいけど、席をたったら、テストは無得点。
ということは、アタシはＦクラス行き。それは嫌。せっかく勉強したんだからＡクラスに行きたい。
ＰＭ１：００
テストは終わった。やっと家に帰れる。きずいたらお腹は痛くなっていた。自分では緊張かなと思ったけど、まさかそれが全ての始まりだったとは、あの時のアタシは知らなかった。

ＰＭ５：００　家にて
優子「ただいま～」
帰ったらお母さんがアタシを迎えていた。
母「おかえり優子ちゃん。試験はどうだった？」
優子「Ａクラスには入れると思う。そういえば秀吉は？」
突然お母さんが表情を曇らせた。
母「秀吉はお医者さんに行ったの。」
優子「具合でも悪くなっ「さあ優子ちゃん。今日は何を食べたい？」
た：　え？」
お母さんが急に話題を変えた。

アタシ、変な事言ったかな？
優子「・・・ネギトロ丼が食べたいな。」
母「そうなの～。じゃあお母さん、お買い物に行ってくるわね～。」
そうやってお母さんは家を飛び出てった。
どうしてなのかはわからないけど、すごく嫌な予感がする。

ＰＭ６：００
お母さんと秀吉が帰ってきた。なんだか二人とも悲しそう。でも秀吉がアタシと目が合った瞬間、二人とも明るく振る舞い始めた。
母「あ：優子ちゃん。あ、す、すぐ夕飯作るからね～。」
秀吉「そ、そうなのじゃ。きょ、今日のご飯はネギトロ丼らしいのう。た、楽しみなのじゃぞ。」

ＰＭ９：００
ご飯も食べて、勉強をして、寝ようと思って部屋を出たら、なにやらコソコソとリビングから話し声が聞こえた。
リビングに行ったらお母さんが泣いていて、秀吉も暗い顔をしていた。
母「ゆ、優子ちゃん。まだ起きていたの。早く寝なさい。」
優子「何で泣いているの？」
母「何でもないわよ。気にしないで」
そこでたぶんアタシの我慢の限界がきたんだと思う。アタシはそこでキレた。
優子「ねえ、何でアタシに話してくれないの!?アタシは知っちゃいけないの!?アタシは何でも受け入れるから教えて！それともアタシに対する意地悪？そうならそうと言ってよ！」
お母さんも秀吉も困っていた。
でも、お母さんは教えてくれなかった。

キャラクター紹介

木下優子　（きのした　ゆうこ）
今回の小説の主人公。
２―Ａクラス次席
召喚獣は黒いうさぎの耳と赤と黒のチェックのワンピースに洋風の刀（オリジナル）
腕輪の能力は一瞬で相手の召喚獣を凍らし、相手にかなりのダメージを与えるが、自分も点数が２００点引かれる。（オリジナル）
英語、数学、そして現代国語が４００点越え。
明久がＦクラスからＡクラスに上がれたことを凄いと思い、尊敬している。
弟の秀吉とお母さんに何かを隠されていることを凄く不満に思っている。

吉井明久　（よしい　あきひさ）
２―Ａクラス
優子のことが好き。

木下秀吉　（きのした　ひでよし）
２―Ｆクラス
医者に行っており（理由はまだ不明）、振り分け試験を受けなかったため、Ｆクラスになった。
母親と一緒に優子に何かを隠している。

坂本雄二　（さかもと　ゆうじ）
２―Ｆクラス代表
Ａクラス並みだが、とある目的でＦクラスに行った。

土屋康太　（つちや　こうた）

２―Ｆクラス
ムッツリーニという別名がある。
ムッツリ商会を開いている。

島田美波（しまだ　みなみ）
２―Ｆクラス
姫路と共に明久に理不尽な理由で暴力を振るっている。

姫路瑞希（ひめじ　みずき）
２―Ｆクラス
Ａクラス並みの学力はあるが、明久が勉強していたと知らず、Ｆクラスにいった。
明久がＡクラスと知ったとき、明久がカンニングをしたと思っている。

霧島翔子（きりしま　しょうこ）
２―Ａクラス代表
優子の親友。
雄二のことが好き。

工藤愛子（くどう　あいこ）
２―Ａクラス
優子の親友。

久保利光（くぼ　としみつ）
２―Ａクラス
優子のライバル。
明久のことが好き。

佐藤美穂（さとう　みほ）
２―Ａクラス

根本恭二　（ねもと　きょうじ）
２―Ｂクラス代表

小山友香　（こやま　ゆうか）
２―Ｃクラス代表

平賀源二　（ひらが　げんじ）
２―Ｄクラス代表

清水美春　（しみず　みはる）
２―Ｄクラス
美波のことが好き。

中林宏美　（なかばやし　ひろみ）
２―Ｅクラス代表

三上美子　（みかみ　よしこ）
２―Ｅクラス

須川亮　（すがわ　りょう）
２―Ｆクラス
ＦＦＦ団のリーダー。

横溝浩二　（よこみぞ　こうじ）
２―Ｆクラス

ＦＦＦ団　（エフエフエフだん）
２―Ｆクラスの団体。
女子にモテないから、女子にモテる、一緒に歩くなどの行為をしたやつを異端審問会にかける。

西村宗一　（にしむら　そういち）（別名：鉄人）
文月学園の教師。補修担当。
生徒は鉄人の補修が怖いと思っている。

藤堂カヲル　（とうどう　かをる）
文月学園の校長。
雄二や明久などからは「ババア、妖怪」と呼ばれている。

真実

優子ｓｉｄｅ

秀吉とお母さんに何かを隠されていることを知った後の毎日、アタシの耳には授業もなにもかも入らなかった。秀吉がアタシに隠していることが気になる。

正直、分かっている。よくないことだろうと。

でも、知りたい。知って楽になりたい。

何だろう。転校？　病気？　病気だったら何だろう。

もしかして…　アタシは…

「…　子さん、優子さん！」

「ふぇ？」

誰かに呼ばれた。周りを見ると、となりに１人のバカそうな男の子がいた。

えっと…　誰だっけ？

「あんた誰？」

失礼だけど聞いてみた。

「優子さん、その質問、すでに４回目だよ？」

そうだっけ？聞いた覚えがない。

「僕は吉井明久だよ。」

そうだった。吉井くんだ。Ｆクラスから Ａクラスまで上がれた子

だ。

「それで何？」

今の私は機嫌が悪い。だからそっけなく用を聞いた。

「・・・ 後で屋上に来てくれますか？」

そう聞かれた。まあ、暇だからＯＫと言っておいたけど。

・・・ でも何でだろう。吉井くんと話していた時、とても不思議な気分になった。今まで感じたことのない気持ちだ。

その後、言われたとおり、屋上に行ってみたら、すでに吉井くんが待っていた。

「あの・・・ 優子さん・・・」

なんだか吉井くん、落ち着いていない。どうしたんだろう。

「僕は優子さんのことが好きです。付き合ってください！」

いきなり告白された。実際、恋に興味はなかった。でも吉井くんの告白は何故か嬉しい。

「こちらこそよろしくお願いします。」

勝手に口が動いた。でも、多分、アタシはそのままの事をどっちにしろ、言ったと思う。

でも何かを忘れている気がする。

告白の後、アタシはお家に帰った。
家にはお母さんがいた。そこで思い出した。
ずっと聞きたかったことを。

「お母さん、何を隠しているの？」

お母さんはその質問を言ったとたん、見たことのないほどの悲しい顔をしていた。
しばらくしたら、お母さんは答えた。

「本当に聞きたいの？」

アタシは覚悟を決めていた。

「優子ちゃん。あなたは病気なの。その病気は世界でたったの６人しか持っていないの。それは、骨が溶け、記憶をなくしちゃうの。そしてあなたはもう長くは生きられない。あなたに残された時間はあと４ヶ月なの。」

アタシは絶望した。
別に死ぬのは怖くない。
でも記憶を失ってしまう。
過去の記憶も、これからの記憶も全て消える。
死ぬだけなら、これからの時間を大切に過ごせばいい。
アタシの場合、記憶は消えてしまう。
なら、何のためにこれから生きればいいのか。
それしか頭を横切らなかった。

優子の気持ち

優子ｓｉｄｅ

あの日からアタシの世界は灰色になった。
放課は一人ぼっちで屋上で青い空を見るようになった。
この世界にはもう長くはいられない。
そう、アタシは記憶と共に消えてしまう。
それなら思う存分変わらない青い空を見よう。
もう他に、思い残すことは無いんだから。

「心配事があったら力になるよ。」
明久くんはそれを毎日言ってくれている。
アタシはいつもありがとうと答える。
でも、今日はそう答えなかった。
どうせいつかは言わないといけない。ならいっそのこと言っちゃおう。
アタシは全て明久くんに話した。彼はびっくりしていた。

「優子にとって最高の４ヶ月にしてあげる。」

優しい彼はそう言ってくれた。

「優子、一緒にお昼食べよう。」
明久くん、愛子ちゃん、翔子ちゃん、久保君、秀吉、Ｆクラスの坂本君と土屋君と屋上で食べたりするようになった。
他にも一緒に勉強会をやったり、楽しいことをたくさん。
そう、明久くんは教えてくれた、消えてしまう記憶でも大切な時間だと。
でも、あの時の私はこの４ヶ月に同じぐらい悲しい事が起きること

を、予想さえしなかった。

優子ｓｉｄｅｏｕｔ

とある2人ｓｉｄｅ

「またアキ、Ａクラスの女子と仲良くしている。ウチらというものがありながら……　Ｏ☆ＳＩ☆Ｏ☆ＫＩよ。」
「明久くん、あなたには私達がいるのに……　Ｏ☆ＳＩ☆Ｏ☆ＫＩです。」
「でもどうやってＯ☆ＳＩ☆Ｏ☆ＫＩするの？」
「私にいい考えがあります。実は……（かくかくしかじか）」
「それいい！これでアキもウチらだけを見てくれるわ。」
「そうですね。これなら明久くんも私達だけを見てくれます。」
「覚えておきなさいよ、アキ。行こう、「瑞希」。」
「はい、分かりました。「美波ちゃん」」

二人は残酷なことを考えた。１人の女子生徒に聞かれていたとも知らずに……

とある二人ｓｉｄｅｏｕｔ

とある団体ｓｉｄｅ

「吉井また女子と仲良くしやがって。あいつにはきついＯ☆ＳＩ☆Ｏ☆ＫＩしないとな。我ら「ＦＦＦ団」はそれを許さない。やるぞ、野郎ども！」
「イエッサー、「須川隊長」！」

とある団体ｓｉｄｅｏｕｔ

とある二人の話を聞いていた女子生徒ｓｉｄｅ

「酷い……　ただの嫉妬で……　これはまずいわ。明久くんが危ない。すぐに誰かに知らせないと……」

その少女は駆け出した。

この話を聞いていたとある女子生徒ｓｉｄｅｏｕｔ

強化合宿の怪しい影？

優子ｓｉｄｅ

「もうすぐ強化合宿か～」
一人で呟いた。
楽しみだった筈の強化合宿なのに何故か変な予感がする。
「はあ～」
自分の声が部屋で響いた。
今日は誰も家にいないから、余計嫌な気分。
「楽しいと良いんだけど……」

優子ｓｉｄｅｏｕｔ

島田さんｓｉｄｅ

「もうすぐ強化合宿よね、瑞希。そろそろ計画の用意をしないとダメなんじゃない？」
ウチが瑞希にそう言った。
実際、計画を行わないと、アキはあの木下とかいう性格の悪い女とずうっと一緒いるんだわ。
こうしないといけなくなったのはアキ、アンタのせいなのよ。
アンタに本当にふさわしいのはウチと瑞希なんだから。

島田さんｓｉｄｅｏｕｔ

姫路さんｓｉｄｅ

「そうですね、美波ちゃん。」
私はそう言った。でも、美波ちゃんは築いていなかった。

あの時、計画の話をしていたあの場所で、全てを聞いていた「Ａクラスの女子生徒」がいたことを。
でも、今はあの女子生徒はいない。パーフェクトな機会ですわ。
「美波ちゃん、計画を変更しますよ。」
「はあ!?どういうこと？アキを許しちゃうの？」
美波ちゃんは驚きを隠せていないみたいです。そりゃあそうですよ。
「違います、美波ちゃん。あの時、あの場所で、全てを聞いていた女子生徒がいたんです。それが明久くんの耳に渡ってしまったら、ダメでしょう？
西村先生にまで知れ渡ってしまったら私達はおしまいですよ。
なので、計画を変えて、あの女子生徒を悪者にしてしまえばいいんです。」
「どうやってあの女を悪者にするの、瑞希？」
美波ちゃんが質問した。
「明久くんの優しさを利用するんです。
仮に、あの女子生徒がペラペラ喋っても、明久くんは、私達を信用してくれます。」
「なるほど。」
「そして、ＦＦＦ団も協力させるんです。」
「?????」
美波ちゃんがびっくりしています。
「ＦＦＦ団も明久くんにＯ☆ＳＩ☆Ｏ☆ＫＩしようとしているんです。
それなら一層の事、協力してやった方がいいかと思います。」
「なるほど!!これなら大丈夫!!確実な必勝法だわ!!
凄いよ瑞希！これならアキを連れ戻せるわ！」
美波ちゃんが納得してくれました。
そうです。この計画で明久くんは私達のほうに向いてくれるはずです。
元々、あなたにふさわしかったのは私と美波ちゃんです。

木下さん達ではなくて、私達があなたの「本当」のお友達です。
この計画で、あなたはそれに築き、また私達と仲良く仲良くするべきなんです。
それは、あなたにとっても、私達にとっても、一番なんですよ。

姫路さんｓｉｄｅｏｕｔ